

抄 録

口唇歯列模型を用いた人に与える印象についてのアンケート調査

石田裕子

笑顔、笑い、会話は最も日常的に発信される社会的信号であり、精神科医の齋藤茂太が「女の顔は女の履歴書」と述べているように、口元や歯列はその重要な要素であると予想される。歯科衛生士として、実際に顔の部位の口元によって認識はどのように異なるのか、また、その際、特にどの部位の変化に注目するのか、口元の変化によって受け取る側へ影響はあるのか、歯列や位置関係について調査することとした。

本研究は、予備実験として口唇の計測を行った結果、笑顔時の平均のアスペクト比は1.68であり、黄金比1.618に近いことが分かり、それを参考として、口唇歯列模型を作成し、M短期大学歯科衛生士学科を対象にアンケートによる調査を行った。

その結果、口唇黄金比+正常な歯列ではポジティブな評価が多く、調和度・親近感スケールで差が認められた。口唇閉鎖+正常な歯列ではマイナスの評価が多く、親近感スケールにおいて1・2年生間 ($P<0.001$)、2・3年生間 ($P<0.001$) で有意差を認めた。口唇黄金比+犬歯唇側転移でのスケールでは、マイナス評価のものが多かったが、活動性スケール

で1・2年生間 ($P<0.05$)、2・3年生間 ($P<0.001$) において有意差を認めた。口唇黄金比+上顎前歯翼状のスケールでは評価にばらつきが多くみられたが、美しさスケール1・2年生間 ($P<0.05$)、1・3年生間 ($P<0.05$)、かわいさスケール1・2年生間 ($P<0.001$)、1・3年生間 ($P<0.00$) 調和度スケールでは、1・2年生間 ($P<0.001$)、1・3年生間 ($P<0.001$) において有意差を認めた。

模型の各スケールの判断に使用した項目について、全学年で歯並びが最も多く、次いで歯の見え方であった。

以上の結果を、今後、臨床に出た際に、歯科保健指導やインフォームド・コンセント、インフォームド・チョイスに活かしていきたい。歯科医師よりも話しやすく、患者が気持ちを伝えやすい歯科衛生士が患者に寄り添い、患者の思い描くニーズを受け取り、今回の研究から知りえた情報を織り交ぜながら提案していき、精神的にも満足のいく技工装置を作るお手伝いが出来たら、より多職種連携の中で患者中心の歯科医療に貢献できると考える。

福岡医健専門学校歯科衛生士科卒業、明倫短期大学歯科衛生士学科専攻科口腔保健衛生学専攻第9回生

原稿受付：2019年6月13日、受理 2019年6月14日

本抄録は2019年3月、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構の学士の学位授与の申請に係る「学修成果・試験の審査」に合格した論文の抄録である。